# 清代華北の農業経営と社会構造

足立啓二

【要約】開港の影響が本格化する以前に、中国の小経営生産様式は如何なる水準に達していたかを分析する作業の一環として、清代華北の農業経営を分析する。華北民農書等に見られる有力経営は、畜力牽引大型化による深耕精作化と、養畜部門と飼料栽培部門とを内蔵して肥料を自給する地力維持方式の改善を二つの技術的特色とする相対的に大規模な経営として現われ、農村は少数の大規模経営と、その対極に存在して雇傭労働を放出する多数の小規模所有＝経営によって特徴づけられる。同時に清代のいま一つの特色は、かかる大規模経営が、商業的農業の開始に伴う新しい集約的な技術体系の前に、華北内では相対的に高い生産力水準を持つ山東・河南などの二年三作地帯から、次第に解体を始めていたことである。間接的経営、或いは地主制の粗野な形である分種制が、漸く体制的に広まりつつあった。

史林　六四巻四号　一九八一年七月

## はじめに

開港の影響の本格化に先立ち、中国における小経営生産様式は、全国的に何如なる水準に達しており、それらが何如なる社会構造を形成していたかを解明する作業の一環として、清代華北の農業経営像と、それを基礎とする社会構造を分析することが、小稿の目的である。

従来の明清経済史研究は、周知の如く、地主佃戸制に著しい重点を置いて進められた。加えて分析の対象は、長江下流デルタの極く一部の地域に集中しており、しかも、地主佃戸制研究にあたっても、分配過程と、その基礎と考えられた人格的従属と対抗の視点を、生産様式全体から切り離して分析する方法が採られた。資料の偏在を考えれば、かかる動向も

故無しとはしないが、そこから構成された地主佃戸関係が、全国的な社会構成として拡大適用され、更に、地主佃戸の対抗関係の発展のみを原動力として、明清社会の発展が論じられる時、それは単なる偏倚に止らなくなる。少なくとも、以下に論じる華北地域においては、諸々の農村調査が示すように、民国期に至っても、所有と経営は充分に分離しておらず、地主制は社会の遍在的基礎となっていなかった。小稿は、華北農業技術に関する西山武一氏の研究、経営面を中心とする片岡芝子氏の研究①の成果を継承しつつ、幾つか残されている清代華北の民農書を主要な素材に、華北社会構造の特質を、その生産力的基礎の分析から明らかにすることを目的とする。

① 西山武一「近世華北旱地農法考——斉民要術以後における華北畑作農業の展開——」『経済発展と農業問題』一九五九年（『アジア的農法と農業社会』所収）。片岡芝子「明末清初の華北における農家経営」『社会経済史学』二五—二・三合併号、一九五九年。「華北の土地所有と一条鞭法」『清水博士追悼記念明代史論叢』一九六二年。

## 一　華北民農書の経営像

まず、清代華北民農書の中から、著者自身の経営に即して著された〝経営農書〟を選び、それを中心に、個別の経営事例を具体的に描いてみよう。

### 1　『農言著実』の経営像

『農言著実』は、陝西省西安府三原の人、楊秀元によって、道光年間に著された。跋によると、楊秀元は、半生にわたる教師稼業を四十過ぎにして辞め、侍養の傍ら自ら農耕に励み、老農にも優る篤農ぶりを発揮した人物である。本書は「半半山荘主人示児輩」のタイトルが示すように、また〝うち（咱家）〟を基準に話が進められている①ことからも分るように、著者が自己の営農の経験を子孫に書き与えた家訓的農書である。この農書が前提とした楊秀元の経営の分析から始めよう。まず、作付方式から。

主穀の中心は麦と粟で、麦の跡地への粟の作付けは、基本的な連鎖である。[2] 麦と粟のうちでは、施肥・収穫等の注意が麦に対してより多く払われており、重点は麦作であると推定される。ところが麦→粟の連鎖が成立しているにもかかわらず、九月の夏作の収穫[3]に先立ち、八月には既に麦が播種されており、[4] 逆の粟→麦の連鎖は成立していない。麦作の予定地は夏期には休閑され、前年度の麦の収穫後に基肥が施され、[5] 七月のうちに大犂などを用いて入念な耕起・整地が実施される。[6] このことは、麦の跡地全体に粟が作付けされないことをも意味する。麦に対する冬期の追肥は、次年度に粟を蒔く土地に対してのみ行われ、[7] また、麦の収穫に際しては、粟作の遅れを防ぐため、続きに粟を蒔く耕地から先に刈り取られる。[8] このように、『農言著実』の作付方式は、麦を軸に、麦と粟とを組み合わせた不規則的・変則的多毛作であるが、主穀だけに注目し、同一圃場を数年単位で考えるなら、平均してほぼ年一作になる。

しかし、同書の作付方式のもう一つの特色は、主穀とならんで、苜蓿（うまごやし）が相当なウエイトを占めていることである。随処に現われる記述を総合すると、秋収後播種された苜蓿は、翌年三月から夏にかけて何度か刈り取られ、[9] 越冬に際しては犂（すき）鏵（へら）の無い犂で再三鋤き、労力をつのって中耕除草し、[10] これを繰り返した後、春作の前に根が掘り取られる。しかも苜蓿の掘り取りが、同時に粟作のための耕起作業になっていることからもわかるように、[11] 苜蓿栽培は、他の作物と組み合わされ、楊家の所有する広い農地の中で、所を替えつつ年々新たに展開されていた。

うちには畑が沢山あれば、年々蒔きたて馬ごやし。年々花咲くふる馬ごやし。[12]

である。こうして『農言著実』の作付方式は、主穀面からみると二年三作より劣るものの、麦―粟の中に苜蓿等を組み込んだ複雑な多毛作であると言える。

さて、『農言著実』の苜蓿栽培への熱意は、楊家の経営における家畜の役割を示す。楊家では耕起用の役畜として、また駄獣として、牛と馬を飼っている。第二章でより詳細に見るように、斉民要術段階に比べても次第に大型化した畜力耕起を実行するためにも、また少くとも二ケ所以上（平川と原上）に分散した遠方の耕地から収穫物を運搬するためにも、牛

馬は不可欠な役畜であった。しかし牛馬は、役畜である以上に肥料の生産装置であった。楊秀元は、やや改った口調で次のように言う。

農家第一の仕事は、まずもって肥料を沢山作ることだ。「沢山家畜を買えば、肥料が足らぬ心配は無い。」と言う者がある。これは間違いだ。家畜を飼っても舎飼いをしなければ、家畜がいないのと同じではないか。たとえ舎飼いをしても丁寧にやらねば、家畜がいても数が少ないのと同じではないか。[13]

このため、楊家は使用人の住み込める大きな馬房とともに、[14]飼料用サイロとしての「草坊子」、敷き土貯蔵所としての「土坊子」を持つ。春から夏に刈り取られた苜蓿は、そのまま牛馬の飼料となると同時に、乾燥のうえ草坊子に貯えられ、また作業のひまな月をみて、麦藁が押し切りで細かくして草坊子に収蔵される。粟の茎葉・豌豆の蔓・麦の麩なども、余す所なく飼料となる。一方、九月～三月までの農閑期を通じて、土坊子に粉砕・収納された土は、[15]毎日朝晩二度、畜舎に敷きつめられ、十日に一度、主人の監督の下に畜舎から搬出され、肥料となる。[16]全国的に見ればもはや後進地域になっていた三原の地にも、施肥を農家の首務とする集約的農法の基底は貫徹されていた。同時に施肥重視の基底が、ここでは家畜飼育部門と、そのための飼料作物栽培部門を自己の経営内に組み込むことによって実現されていたことがわかる。

労働力の中心は火計（伙計）である。楊家の場合、伙計は従属的な労働力ではなく、毎年毎年雇傭される年傭いの農業労働者である。[17]彼等は、農繁期のみならず、秋収後から春作前までの農閑期にも通年的に傭われ、楊家の労働力の中心となっている。しかし伙計と同様に、時期によってはそれに勝る意味を持っているのは同書で日子、若くは芒工と呼ばれる短期傭いの労働者である。先にみたように、楊家の作付方式は、主穀についてみると麦→粟を基軸とする。この作付方式の労働配分上の特色は、四月から五月の間に、極度に農作業が集中することである。この時期、古来〝収麦如救火〟と言われた麦の収穫の後、直に粟の播種が必要とされ、手労働も用いた粟の中耕がこれに続く。治安の悪さから頻発する、収穫直前の麦の窃盗を防ぐため、農場の昼夜にわたる見廻りが必要とされたことが、この労働の輻湊を一層増幅した。[18]まこと

に楊秀元も言う如く、収穫の十日間を乗り切れば一年の辛苦は終り[19]、という状態であり、逆に九月秋収以後、春三月までは、農作業は全くひまなものであった。[20] このような労働の輻湊は、敏速さを要求される華北旱地農法の中においても、後述の二年三作方式などと比べて、とりわけこの作付方式に現われる顕著な傾向であった。この年間労働力配分の極端な不均衡は、通年的農作業には長工を用いつつ、農繁期には、必要に応じて周囲の小規模経営から、大量に芒工・日子を集めることを有利にする。また芒工・日子を大量に傭える経営を、生産力的に他に比べて有利にする。短工は、収穫期においても、中耕除草においても、小費を惜しまず投入された。[21] 楊家は長工を基幹としつつ、大量に短工を用いた経営を行っていた。

では主人の楊秀元の役割はいかなるものか。彼は老農にも優る農業技術を身につけた人物で、これは『農言著実』のもつ具体性にも示されているが、彼の主要な役割は管理労働にある。彼が親自に行うべしと教訓するのは、収穫時の監視と伙計の督促、堆糞時の監督などの業務であり、[22] 直接的な農作業は全て、〃著火計〃 〃教火計〃 〃叫人〃という形で遂行される。加えて、春作に先立ち、その年にはいかなる農具を買い揃えるべきかの相談に与る伙計がおり、[23] 直接的な農作業をまかされるような、他の史料で大伙計などと呼ばれる幾分管理的な業務に携わる長工のいたことも考えられる。このように、主人は直接農作業には参加しなかった。しかし彼は雇傭労働者数の決定を始めとする重要事項から、伙計の食事・牛馬の飼料の中身にまで目を光らせる、自ら労働する経営者であった。

『農言著実』の文中に、楊家の経営規模を直接に語る部分はない。しかし、雇傭労働の多用や牛馬の多頭飼育からみても、〃うちには畑が多い〃と自認するとおり、かなりの大規模経営であったと考えられる。更に次の二点は、経営の大きさを最も直截に示すものである。一つは、麦の脱穀調整に際して、大規模な「分業」が組織されていること、[24] 一つは、平川の麦を収穫する日には、原上の車馬や火計を平川に総動員して刈り入れるが、しかしそれでもなお、原上には家畜の管理要員として一名、原上の麦畑を巡邏して盗難を防止する要員として二名の雇傭労働者が残されねばならないとすることである。[25] 楊家の所有する家畜数・雇傭労働者数・経営面積は、相当なものであったと言わねばならない。

経営の商業的性格何如について一瞥しておこう。楊氏も貨幣経済から自由ではない。短工への労賃は貨幣で支払われており、[29]農器具が購入され、[30]家畜の飼料も部分的には購入されたようである。[31]しかし、作付方式からもわかるように、生産物の中で販売されるのは、麦を中心とする穀物だけであり、[32]しかも、それとても、どれだけ売りに出されたかは疑問であり、[33]本格的な販売のための生産とは言い難い。楊秀元は、牛馬の飼料[34]から伙計の灯明の油[35]まで惜しみに惜しみ、省事・省力・省工夫を連発するケチ精神に富んだ経営者である。その限りでは『沈氏農書』の沈氏に酷似する。[36]しかしその商業性は低く、その生活水準・食料事情は、江南のそれに比して、はなはだ貧しい。[37]

## 2　『西石梁農圃便覧』の経営像

『西石梁農圃便覧』は、山東省青州府日照県西石梁村の人、丁宜曾によって、乾隆二〇年に著された。宜曾は、福建按察使・江西布政使等を歴任した丁士一の子として生れたが、自らは幾度か科挙に失敗した後、官界への道をあきらめ、三〇歳ごろから農業に打ち込んだ人物である。[38]この意味で『農言著実』の著者と似通った社会層に属すると言ってもよい。同書は著者二〇年来の蓄積をもとに、自分の経験したことだけ、西石梁村に具体的に適したことだけを記した、極めて在地性の強い農書であり、農耕技術だけでなく経営方法が随所に示され、『農言著実』ほどではないにせよ、一つの経営農書として読むことができる。

『西石梁農圃便覧』を特徴づける第一の点は、その整った二年三作方式である。第一年目の三月に播種された黍・稷・穀・穆・蜀秫・陸稲などは、[39]六月大暑の早黍稷から始り、黍・穀・穆・蜀秫の順に八月の陸稲に至るまで順次収穫され、早収の作物の後には緑豆などを緑肥としてはさみつつ、その跡地は麦作に当てられる。[40]八月秋分に播種された麦は、[41]第二年目の五月芒種に至って刈り取られ、その跡地には雨を待って大豆が播種される。[42]この大豆は九月寒露に及んでようやく収穫され、もはや冬作物の作付け期を過ぎた圃場は、来春の穀作に備え、大豆の葉を犂き込んで整地される。[43]『西石梁農圃便覧』は、黍粟等→冬麦→大豆→休閑という、典型的な二年三毛作の体系を、みごとに示している。[44]

この二年三作は、単に同一の圃場から、より頻繁に作物が収穫されることを意味するだけではなく、幾つかの特長を持つ。まず第一は、旱地農法地域における最も商品価値の高い主穀である麦に加えて、長江下流における商業的農業の展開に伴って、当時山東地方においても頓に需要の高まっていた油・肥料原料としての大豆[13]をその中に組み込んでいるという商業性の高さである。大豆への入念な中耕除草も、このことと関る。[14]第二は、大豆という地力維持作物に加え、黍稷類の相対的な生育日数の短かさを利用した緑肥が、二年三年方式の内に組み入れられ、地力維持の自己完結度が増していることである。第三の特長は、この作付方式が、華北の他の作付方式に比べて農作業の輻湊を大幅に軽減することである。一年目と二年目の圃場が相半ばして組み合わされるなら、三月の粟黍類の播種から始り、五月に大豆の播種、八月に宿麦の播種が配され、その前後に各作物の収穫と中耕除草とがみごとに間配られ、春から秋の終りまで間断のない作業配分となる。夏作の穀物の収穫期が、作物によって六月大暑から八月秋分にわたっていることも、この効果を高める。『農言著実』にみられた四～五月期の農作業の極度な輻湊とは好対照をなす。

同書を特徴づけるいま一つの点は、その経営形態である。丁家の経営では、耕種・中耕除草・肥料作り・家畜管理などの基本的農作業は、全て「犂戸」と呼ばれる農民によってなされ、必要に応じて短工の労働で補助される。この犂戸の性格は大変複雑である。

畑の中打ちは何より大切である。……この時には毎晩犂戸にみな申しつけ、明日はどの土地を中打ちするはずかを談義のうえ、土地台帳に書きあげ、明くる日には、隅々まで調べねばならぬ。[15]

とあるように、彼等は一定の土地に責任を持ちつつも、[16]主人の統括の下に農耕を行っている。犂戸は一面では、自分の使用する牛の飼料を日常的には自ら支弁する主体である。[17]また、犂戸が豆の中耕除草を行う際に、短工の労賃一〇〇〇文につき、三〇〇文は主人持ちにするのを奨励していることは、[18]労賃犂戸持ちの雇傭労働も存在していたことを逆に示している。かくして一面では犂戸は営農に必要な何程かの土地と牛と農具をまかされ、独立した労働過程を持つ、何がしかの独

立した経営主体である。しかし、牛具・家屋だけではなく、種料から正月以降の飼料不足期の飼料さえも主人の負担であり、[49] 農繁期には犂戸に対する糧食の給与や、犂戸の担当する圃場への主人の裁量による短工の補給さえなされ、それが不充分であると犂戸は他人の雇工として傭われてしまう程の、[50] ある面では自由な、ある面では経営主体としての性格に乏しい存在であった。さきの中耕除草とともに、穆の収穫時においても、盗難防止のため、一筆の地ごとに犂戸に収量を報告させて、いちいち検査するなど、[51] 主人の生産過程に対する関与は少なからぬものがある。分配過程については触れられていないが、独立性の弱い請負農としての犂戸の性格からして、丁氏の取り分の相当高い収穫物の分割がなされたものと、考えられる。

丁家の経営規模も明確にはし難い。しかし、中耕除草に際し、土地台帳を用いて、各犂戸の次の日の予定を登録していること、また〃この時までに、まだ一度も豆の中打ちをしていない犂戸がいたら〃という話からしても、[52] 何人かの犂戸をかかえていたことは疑いない。従属的な経営でも、個別経営単位の大なる者は二～三頃、小なる者も一頃という当時の史料に照せば、[53] 丁家の経営面積全体は相当大きなもの――少なくとも数百畝にのぼる――と考えられる。

### 3　太和堂李家の経営

続いて山東省済南の章丘県東蘞硫村に居を構える太和堂李家の光緒期における経営ぶりをみよう。これは農書ではなく、景甦・羅崙両氏の『山東経営地主底社会性質』（一九五九、山東人民出版社）に、経営地主の事例として紹介されたものである。同書には六〇年前の事態の聞き取り調査という資料蒐集上の限界があるが、その中で太和堂李家は、文契存根・雇工老賬・堆金老賬・外借老賬・碑文などの資料に基き、最も詳細に経営が再現された事例である。さしあたり必要な側面を紹介しよう。李家は乾隆中期から光緒期にかけて三代に渉る零買によって土地を集積し、光緒後期には村内四七二畝、村外四三畝の土地を集積し、そのうち村内の土地を直営した。労働力としては管理労働を行う大伙計一名、農耕の中核となる二伙計六名等一三名の長工の外、短工二〇～四〇名、月工数名が、いずれも人格的には自由な労働力として、常用され

た。役畜としては九頭の牛の外、驢馬と騾馬が各四頭利用され、一般農民に優る半尺の深耕がされた外、一四棚の豚小屋を持ち、四〇頭の豚・一〇〇余頭の羊を飼い、これら家畜から毎年五〇〇〇余車の肥料を確保した。作付方式は高粱・粟→麦→蜀黍・豆→休閑の二年三作が中心のようである。[63] 肥料と労働力に優る太和堂は、雑糧に比べて価格の高い麦を、一般の農民よりも多く作付けし得たという。このほか李家は五〇人近い大家族であったこと、村内を主対象とする雑貨中心の商業と併せ、金貸しをも営み、捐納によって爵銜を得ていることなどが特色である。丁家などに比べればやや低いが、李家も楊家や丁家と相似た社会層に属し、作付方式の面では同じ山東の『西石梁農圃便覧』に、その他の経営形態の面では『農言著実』に類似した大規模経営である。

以上、清代中期〜後期の華北における三つの経営事例を分析・紹介してきた。三者の間には作付方式の面でも、経営の直接性の度合においても参差がある。それは後にみるように、それなりの地域的・歴史的意味を持っている。しかし同時に、これらはいずれも相当広い土地を所有し、それを所謂地主的にではなく、それなりに直接的に経営していることに、農耕技術面を除いても共通性を持っている。では、このような経営が有力経営として存在し、民農書の主体となり得た根拠は何か。それを次章では、まず唐宋変革以後の華北農業の技術発展の特質から規定しよう。

① 注⑫・㉕など参照。
② 収麦後。先拓地。得雨就要種穀。
麦後拓地種穀。自是一定之理。
③ 九月秋収以後。本無活做。即牲口亦閒了。
④ 八月種麦時。或地畔墳塋。以及坡塊。有長成底白蒿。
⑤ 麦後上底糞。糞亦不要太大。
この作業は、種穀・鋤穀の後に記されており、麦の跡地に栽培する粟への基肥について述べたものではない。
⑥ 七月当種麦前後。耨地最要緊。両次地已経用大犂過。該収穫時矣。
⑦ 地将凍。再無別事。就丟下拉糞。明年在某地種穀。今冬就在某地上糞。先将打過之糞。再翻一遍。糞細而無大塊。不惟不圧麦。兼之能多上地。
⑧ 原上取麥之時。実在長的不好。定行要杆子彭底時節。先将麦後種穀之地彭了。然後再彭其余。
⑨ (三月) 苜蓿花開円。叫人割苜蓿。先将冬月乾苜蓿積下。好餧牲口。但割底曬苜蓿。総要留心。午右以前底苜蓿。経日一曬。就可以捆

了。午右以後底苜蓿。水気未乾。再到第二日収拾。

与牲口喫苜蓿。麦前不論長短。都可以将就。惟至麦後。苜蓿不宜長。長則牛馬俱不肯喫。賤下殊覚可惜。

⑩ 苜蓿地経冬。先用拓犂子。在地上下。乱拓幾十回。省旁人冬月在地内掃柴火。掃柴火不大要緊。第二年苜蓿。定不旺矣。至於鋤。須到来年春暖花開。再叫人鋤。

⑪ 挖苜蓿根要細心。叫火計靠鑊子挖。有苜蓿処。不待言也。即無苜蓿処。亦要心挖。有土壟。務必打砕撥平。総似用鐮鐮過底一般方妥。所以然者何也。得雨後。就要種秋田禾。不如此。日曬風吹。地不収墻。兼之没挖到処。定行不長田禾。牢記。牢記。

⑫ （正月）此月節気若早。苜蓿根可以餧牛。見天日著火計挖苜蓿。咱家地多。年年有種底新苜蓿。年年就有開的陳苜蓿。

⑬ 農家首務。先要糞多。或曰。多買牲口。則糞亦不愛其少矣。余曰。不然。有牲口而不襯圈。与無牲口者何異。即襯矣而不細心。与有牲口而少者何異。

⑭ 注㉜参照。

⑮ 二三月内。実在無活可做。或拉土。或鋤草。就者両様事了。但此二事。除過麦秋二科。若無活可做。就著做事。如草房子寛大。可以積每年底麦稭。向妨過著閒日子。就教人将草鋤底放満。或者無多底房屋。但有工夫。就要鋤草。不然。天有不測風雨。下上幾天。牲口没草喫。你看作難不作難。至於土。天日圈内是定要底。有乾土可襯。不必言矣。有土房子放土。亦不必言矣。如若無土。又無土房子放土。即或有放土地方。卻不甚多。万一下上幾天雨。圈内無土可襯。你看作難不作難。所以此二事。我于二月三月内言。但無活可做。就著做此事也。嗣後無活底天気。九十冬颱悉照比。

将豆蔓子稽好。候正場清白稽稽時。将豆蔓子稽在中間。隨便都抖擻底餧牲口。

辟如先上槽餧牲口。寧多添草。少拌麩子。

⑯ ……又必須于每日早晚両次。著工人襯圈。糞要撥開。土要打砕。又要襯平。或早刻用土多少。晚間亦如之。照日査算。過十日一期。令工人出圈。周而復始。総要親身臨之。則日積月累。自然較旁人多矣。

⑰ 毎年家雇火計。早晚飯先離不得菜喫。門口丟些余地。種蘿蔔白菜。或蹺或嚼。七月喫起。可以直至来年麦口。

⑱ 注㉕参照。

⑲ 你們在家。成年享福。過著収割才忙十数天。将者幾日。用意用心。著実看守。就算你們一年底辛苦了。

⑳ 正月無事。著火計儘行到麦地。拾瓦片甎頭。……二三月内実在無活可做。……九月秋収以後。本無活做。即牲口亦閒了。……冬天無事。或著火計一人打土壟。……臘月火計無事。亦照六月。定行将樹木。一齊澆上一次。第二日埋平。……

㉑ 穀要鋤成。麦要種成。……人愈多者愈好。勿以日子価大。吝惜小費而不為也。

㉒ 注⑯⑲参照。

㉓ 三月麦口跟前買農器。先前要与火計。商量該買拾没。

㉔ 麦堆収起。得風就揚。勿遺。人多更好。揚底揚。裝底裝。掂底掂。担底担。不大時刻。可以清白。

㉕ 麦熟時節。先収平川。次収原上。咱家中収麦之日。原上車馬並火計。都要下原才是。但原上風気。不比從前。総要弄火計或芒工三人。一箇餧牲口。両箇在麦地内。前後左右底巡邏。不可頃刻怠。……不但白昼如此。就是晚上。也要著火計並芒工。一齊出外巡邏。

㉖ 原上多得用杆子。不肯割。不過為省銭計耳。殊不和杆子雖好。難免不傷麦。況多不好乎。

……及種穀之後。麦苗斉出。不惟収割之時。少収了麦。兼之鋤穀之時。多費了銭。雖悔何及。

以上二例の外、注㉑参照。

㉗ 注㉓参照。

㉘ 近来牲口草漸漸貴了。叫人割麦。不惟多収些粮食。也可以多積些草。

㉙ 糧食還要過日子。還旧帳。納銭糧。人情門戸。一切応酬。都要靠糧食哩。

但し、これらの経済活動も必ずしも糧食を一旦貨幣化した上でなされたかどうかさえ、明らかでない。

㉚ 上冬来早辰喫米粥。可以不用餅。有大麦炒熟磨麨。拌得一喫。午刻做些麺食。有余底麦。還能糶了使銭。

㉛ 冬月天気餧牛。和和草最好。兼之省料。

㉜ 馬房内火計們。晚上点燈。只許一盞。経営牲口。待牲口餧飽。即刻吹燈睡覚。免得費油。馬房内不許招留外来不明之人。並不許招留伊等親戚朋友。

㉝ 拙稿「明末清初の一農業経営」『史林』六一―一参照。

㉞ 注⑰㉚の食料事情を、農繁期には長工に対して連日、肉や魚と一杓の酒が出され、普段から毎日半杓の酒と隔日の肉・魚が与えられる『沈氏農書』のそれと比較せよ。

㉟ 中華書局版に対する王毓瑚氏の解説参照。

㊱ 自序に言う。

……以事皆身歴。非西石梁土所宜。及未経験者。概不録也。……

㊲ 三月：種稷稲粱秫稌黍。

㊳ 六月大暑：此時早黍稷可穫。隨割隨場。稀種緑豆。俟初伏。犂翻豆秧入地。種麦勝於糞。

七月：稷。八九分熟便刈。稍遅遇風即落。将地種蕎麦。或稀種緑豆。秋後場起種麦。

七月立秋：割黍後。将地鋤一遍。鎊去黍茬。使地力帰於豆角。既可多結。又宜麦。……割穀稑。……

七月処暑：砍蜀秫。

八月秋分：穫稲畢速耕。多送糞種麦。

㊴ 八月秋分：種麦正在此時。土欲細。溝欲深。糞欲多。種欲匀。

㊵ 五月芒種：刈麦。麦熟時。帶青割一半。合熟一半。……種黄豆白豆赤豆米豆大黒豆。……

五月夏至：割麦以後。麦既要速打。又須趁雨種豆。……

㊶ 九月寒露：割豆正在此時。遅則有崩炸之患。

九月霜降：此後当秋耕地。将豆莢捻入地中。来春田禾自盛。

㊷ 注㊳のささげの挿入など副次的要素もあるが、中心は、この二年三作である。

㊸ 拙稿「大豆粕流通と清代の商業的農業」『東洋史研究』三七―三参照。

㊹ 例えば注⑱など。

㊺ 四月：鋤地最為緊要。……此時当毎晩伝斉犂戸。商量明日該鋤何地。登記地冊。次日徧査之。

㊻ 四月小満：犂戸此時有未鋤完頭遍者。急須添工。三日内鋤完。再鋤第二遍。

この記述は、犂戸が特定の畑に責任を持っていることを、より明瞭に示す。

㊼ 十二月小寒：老牲口。自此置煖室中。用乾糞塡足。才温便換。飲以温水。過老者喂豆餅。……無力犂戸。飼養失宜。多致倒斃。……

㊽ 六月大暑：舎弟莞工。犂戸鋤豆。添工千銭。主認三百。亦勧農意也。可做而行之。

㊾ 歳 論耕：照邑農夫、狃於習俗。不特牛具房屋田主出辦。正月以後。口糧牛草亦仰給焉。

㊿ 四月：犂戸放糧。固不可欠。雇入添工。更難少緩。亦有此時不放糧

し、麦→莜谷等のサイクルの存在を含め、経営面積四七二畝の作付指数が一・四四となること、麦、高粱＋粟　莜谷＋豆の作付面積がほぼ同水準になることなどから、全体的には二年三作方式と考えるのが妥当であろう。

添工者。使犂戸為他人作傭。

(51) 七月立秋：犂戸割穆。必逐段報数記冊。自己仍逐段査之。

(52) 注(46)参照。

(53) 第四章注(23)参照。

(54) 同書の著者は、李家の作付方式の年二作的側面を強調している。然

## 二　華北農法の到達段階

唐宋変革以後の農業発展は、地力維持方式の改善を鍵鑰とする集約的農法によって特徴づけられる。しかしこの一般的命題が、南北相異った形で実現されたこともまた、唐宋変革以後の一つの特徴である。南における農業の集約化は、その行き着くところ、鉄搭（びつちゆう）・耘盪などを労働手段とする小農法の徹底化と、自己の土地からの生産物に依らぬ地力再生産を特色とする。その一つの典型を明末清初の『沈氏農書』に見ることができる。これに対して華北の集約化は、少なくとも明清のある時期までの支配的形態としては、技術構成の面でも、地力維持方式の面でも、南とは異った方向に進む。

華北における第一の特徴は、大農法（畜力牽引による大規模農法）が一層発展することである。最も端的に現れる耕起過程について見よう。斉民要術段階における一具牛が、二頭の牛と、それとともに使用される一連の農耕具のセットであることは、既に明らかにされている。[1] ところが時を経るにつれ、三頭・四頭の牛をセットとする耕起方法が現われて来る。著名な例は『王禎農書』中の記述である。[2] そこでは、南方の水田で一犂一牛を用いるに対し、北方農俗として、両牛・三牛、或いは四牛で一犂をひかせることを語る。明清の資料では、この現象は一層明確化し、要術段階とは異り、四頭を一具牛とする呼称が普及する。先の太和堂李家では、四頭を以て一犋となし、九頭の牛で二セットを組み、一頭を閑牛子としている外、[3] 牛四頭を一具といい、貧民は三～四家で一具を構成する例、[4] 陪牛と呼ばれる具牛四頭を自備した客戸の存在など[5] がその例である。『池北偶談』がかの王猛の故事を引きつつ、現在では江淮以北では牛四頭を一具とすると語るのは、[6] 象

徴的である。勿論二頭を一具とする例も有り、また近代に入れば、後に見る理由から牛はむしろ減少傾向にあるが、少くとも四頭を一具とする方法が各地に広まっていたのは事実である。

牽引の大型化は、深耕を可能にすると同時に、耕起の深さを多様化させた。『馬首農言』は犂稍などの調整で半寸〜六寸の耕深の調整を教え、[7]『知本提綱』は二犂一牛から一犂四牛に到る様々な耕起法に依って、深耕の場合は尺余、甚しきは二尺に及ぶ耕起法を講じている。[8]これは同時に、耕起の目的別多様化と、反復入念化を意味する。陝西には『頭遍打破皮。二遍揭出泥』の諺が有り、耕起の際は、先ず無反転の拓犂で地皮を破り、続いて大犂で何度か底土を抉り出すのを通例とした。[9]深耕が犂き返しの必要度を高めた結果、三段階・五段階の耕起・転耕さえ言われる。[10]

更に大規模牽引による深耕＝集約化は、反転される土塊を大きくし、必然的に整地過程の充実を要求する。西山氏も説かれる如く、[11]労中心の要術から耙労並重へ、更には大犂小犂を用いた反復耕起の後、大耙―小耙―労と整地を重ねる[12]大農法集約化が進む。

畜力化大規模化は他の過程でも進む。播種に際しても耬種が引き続き行われ、[13]中耕除草の畜力化＝耬鋤も引き続き試みられる。[14]更に収穫においても南北の技術は分化し、『王禎農書』には、南の鎌に対し、北の鉾刃が十倍の効率を顕すことが記されるが、[15]この大鉾は『農言著実』では杆子の名で呼ばれ、一面ではその収穫の粗放さが穀物の損失、茎葉収量の減少を来すことを警戒しつつも、労働効率の面から捨てがたく用いられている。[16]こうして華北農業技術の集約化は、まず畜力牽引の大型化による深耕精作として現われる。

畜力牽引の大型化と相携えて進む華北農法集約化の第二の特徴は、家畜利用による地力維持方式の改善である。要術段階では、一具牛小畝三頃の適正経営規模に対し、二頭分の肥料は僅かに小畝六畝に施すだけであった。[17]肥料とは、地味の美悪をみて瘠地に対して投入するものに過ぎなかった。唐宋を境とする地力観・肥料観の変化は、陳旉の農書が端的に示しているが、[18]華北においても、清代ともなると、先の『農言著実』が言うように、施肥は農家第一の任務となる。

この施肥重視の傾向は、江南農業とその基調を同じくする。然し、華北の自然条件は南よりも遙かに酷しい。草木や河泥などで、自己の土地以外から肥料要素を取得することは困難である。また社会的条件――商業的農業の未発達・生産物の収益性の低さ――は、少なくともある時期までは、華北における購入肥料の使用を制約していた。かかる故に、肥料は経営内で自己完結的に生産されねばならなかった。そのために、畜力牽引大型化に伴って多頭化した役畜に加え、多数の中小家畜を飼い、そのための飼料を自己の経営内で栽培し、それによって家畜糞を多量に得る経営方針が採られる。『農言著実』の分析で、既にそれを見た。そこでは主穀茎葉に加え苜蓿が大量に飼料化され、畜舎に加えて草坊子・土坊子が建設され、入念な舎飼いが厩肥を生み、麦を中心に基肥と追肥がなされていた。かかる複合体系は『豳風広義』にもみられる。例えば豚を飼うには、高くつく麩の購入に依らず、苜蓿を栽培し、春から夏にかけて一寸許りに伸びるごとに数回刈り取り、飼料とすると同時に、乾燥させて碌碡でひいた上で貯蔵して、冬場の飼料に備える方法が採られた。[19] しかも注目すべきは、華北の大農法経営においては、この肥料生産が極めて大々的に実行されている点である。太和堂李家では、一七頭の役畜の外、四〇頭の豚、一〇〇余頭の羊が飼われ、年々五〇〇〇余車の肥料が生産されていた。同書に引く樹荆堂畢家の場合も、牛一〇余頭、豚二〇余頭、羊一〇〇余頭が飼育されていた。[20]『豳風広義』畜牧大略では、二万銭の元手をかけて豚・羊・鶏・鴨を飼い、苜蓿を多く栽培し、二人の飼育要員を備い、多くの収益をあげつつ、同時に多量の肥料を生産する方法が奨められている。[21] また豆科植物を多く作り羊を飼う法も講ぜられるが、そこでは五〇～六〇頭の羊を一つの羊群と見なしている。[22] 太和堂や樹荆堂は特殊な例ではなかった。やや特異な例となると、僕州の許衛なる人物が、豚数百頭を飼って大儲けしたという逸話さえある。[23]

施設の面では、サイロ・厩舎とともに、肥料製造施設も大型のものが作られる。『教稼書』は、康熙末に著された農書で、そのオリジナル部分が殆んど肥料論にふり向けられている点で、極めて明清的な農書であるが、そこには山東の有力な家で、敷き瓦をしきつめた深さ丈余に及ぶ巨大な肥料溜めから、〝池発糞〟と呼ばれる肥料を、年々大量に生産してい

る様がみられる。[24] 家畜は役畜としての役割を増すと同時に、それ以上に肥料源としての性格を強めていた。『斉民要術』が羊や豚を乳製品や食肉の源と捉えているのに対し、[25]『農言著実』が、まず第一に肥料源として牲口をみているのは象徴的である。

かくして清代に至る華北農法の発展は、大農法の一層の拡大充実と、養畜部門を組み込んだ自己完結的地力維持方式の改善として特徴づけられる。このことは、集約化・精作化の命題が、華北においては大規模経営が実行する大農法に、集中的に実現されていたことを意味する。大規模経営は、華北における旱地農法の生産力発展の一つの帰結であり、相対的に高い生産力水準の体現者であったと言える。しかもその経営の性格上、完結的・安定的な経営であり得た。華北民農書の経営像が大規模経営として現われる技術的基礎はここにある。

① 渡辺信一郎「漢六朝期の大土地所有と経営」『東洋史研究』三三―一、二　一九七四年。

② 『王禎農書』巻二墾耕篇第四
北方農俗所伝。……旱田陸地。一犂必用両牛三牛或四牛。以一人執之。量牛強弱耕地多少。其耕皆有定法。……南方水田泥耕。其田高下不等。一犂用一牛挽之。

③ 『山東経営地主底社会性質』三六頁。

④ 順治『登州府志』巻八
用牛四。謂之一具。窮民有至三四家合一具者。

⑤ 第四章注㉓参照。この二例は、片岡氏が前掲前論に引かれている。

⑥ 『池北偶談』巻二一　十具牛
王景略臨終。扡其子皮十具牛。為治田之資。不為求官。亦葛侯八百本桑之意。今江淮以北。謂牛四頭為一具。俗語亦有所本。

⑦ 『馬首農言』種植。但しこの文は同県の張耀垣の『種植諸説』に依る。
犂之浅深有法。欲微深。則向前稍送之。欲微浅。則向後稍抹之。欲大深。則将上木貫打緊。下木貫打鬆。欲大浅。則反是。……凡犂田深不過六寸。浅不過寸半。

⑧ 『知本提綱』農則耕稼一条
軽土宜深。重土宜浅。用犂大小。因土之剛柔。剛土宜大。柔土宜小。且其土有用一犂一牛者。有一犂二牛者。有用三牛四牛者。有用二犂一牛者。有浅耕数寸者。有深耕尺余者。有甚深至二尺者。

⑨ 『農言著実』には次のようにある。
麥後之地。総宜先拓過。後用大犂揭両次。農家云。頭遍打破皮。二遍揭出泥。此之謂也。
また『知本提綱』も次のように言う。
……故初耕宜浅。惟犂破地之膚皮。掩埋青草而已。二耕漸深。見泥而除其草根。諺曰。頭耕打破皮。二耕犂見泥。

⑩ 『知本提綱』農則耕稼一条
転耕返耕也。或地耕三次。初耕浅。次耕深。三耕返而同於初耕。或

地耕五次　初耕浅。次耕漸深。三耕更深。四耕返而同於二耕。五耕返而同於初耕。

⑪ 西山前掲書　一一二頁〜。

⑫ 『知本提綱』農則耕稼一条

……故必先用鉄齒大耰。縱横疏散。俟条塊既開。再用鉄齒小耙。摟去根株。然後磨労。土無不細矣。

⑬ 例えば『農言著実』に、

麥後種穀。看墻大小。総耮耮為主。……

⑭ 古くは『農桑輯要』巻二播種、種穀所引の『種蒔直説』に耮鋤が見え、また『知本提綱』にも次のように有る。

……然或値大荒之後。草生遍野。人工欠少。宜造三刃耮犂。一驢前駕。一人牽引。則縱横成行。以鋤荒蕪。日可去草二十余畝。又無碍於禾苗。其功過耘鋤数十倍。此耘広田之法也。

⑮ 『王禎農書』巻四　収穫篇

今北方収麦。多用彩刃麦繩。彩麦殺於腰後籠内。籠満即載而積於場。一日可収十余畝。較之南方以鎌刈者。其速十倍。

⑯ 第一章注㉙参照。

⑰ 『斉民要術』巻頭雑説。

⑱ 前掲拙稿「明末清初の一農業経営」第二章参照。

⑲ 『豳風広義』巻下　豚　収食料法

養猪以食為本。若純買麩糠飼之則無利。……唯苜蓿最善。採後復生。一歳数剪。以此飼猪。其利甚広。……欲積冬月食料。須於春夏之間。待苜蓿長尺許。俟天気晴明。将苜蓿割倒。載入場中。攤開晒極乾。用碌碡碾為細末。密篩過収貯。……

⑳ 『山東経営地主底社会性質』七〇頁。

㉑ 『豳風広義』畜牧大略

舎三畜（牛・馬・驢のこと）而専言猪羊雞鴨。亦資生之一法也。大約不過用二万銭之資。而数年之間。其利百倍。惟多種苜蓿。広畜四牝。使二人掌管。遵法飼養。謹慎守護。必致蕃息　……又多得糞壌以為肥田之本。

㉒ 『豳風広義』羊　択種

欲畜羊者。須九十月間。於羊市上。揀買肥大毛粗尾長犢羔母羊一二十口・羝羊一口。……及至春月。可得羊五六十口。便成羣矣。

㉓ 宣統『滄州志』巻六

許衛。滄州人。……本中人之産。素善営財。弘治初年。歳多豊稔。斗豆値十銭。秕稍増之。家積数百石。募力牧豚豕数百口。……踰歳積百金余矣。

ただし、同書巻六所収の逸話が全て話の中味どおりの年代のものであるか、疑わしい点が多い。

㉔ 『教稼書』

……若斉魯有力之家牛馬圈。其製頗妙。法於圈内与房。等堀一大池。深丈余。底及四旁。皆磚累極堅固。注水不漏。……掃糞入池。牲口脚下。総不留糞。極潔浄。池乾則入水。湿則入土。亦入青草。三間一池。可得糞百余車。……土人謂之池発糞。較牛踐糞。更有力。

㉕ 『斉民要術』巻五での羊や豚の位置づけを参照。

## 三　作付方式と農産物商品化の地域類型

華北民農書にみられる大規模経営の社会的歴史的な位置を第四章で確認するが、その準備として、これらの経営をとりまく諸条件のうち、作付方式と、それと密接に関連する商業的農業発展の地域類型を明らかにしておこう。まず作付方式から。

第一章の民農書の経営分析から、幾つかの異った作付方式を見出した。第一の類型は『西石梁農圃便覧』に見られた。それは粟・高粱等→麦→大豆→休閑と言う典型的な二年三毛作である。太和堂李家の作付方式も、同一の類型に属す。かかる作付方式は、『皇朝経世文編』に収められた李兆洛「鳳台県志食貨」や、尹会一「敬陳農桑四務疏」にも、それぞれ黍→麦→大豆→休閑、高粱・早穀・（棉花）→麦→豆・晩穀という型で示される。[1] 乾隆『汲県志』にも、早穀→小麦→黒豆・黄豆の二年三作が定式化されている。[2] 山東や河南と河北の一部などの地方では、所謂二年三毛作が行われていた。この作付方式は、販売可能性の高い穀物がより多く生産されると同時に、豆科作物によって地力維持が容易になること、旱地農法のうちでは年間の作業配分が最も平均的であること等を経営上の特色とした。

作付方式の第二の類型は『農言著実』にみられた。そこには麦→粟の連鎖が有っても粟→麦の連鎖は成立せず、主穀のみを取り出すと年一作に準ずる地域であったが、主穀の間には苜蓿など幾つかの作物が挿入され得た。同様な事情は陝西興平の人、楊屾の手になる『知本提綱』にもみられる。そこでは山東河南に比べて遙かに遅い五月に粟の播種を行ない、八月には冬麦が蒔かれた。[3] 従って麦→粟サイクルは有っても粟→麦は無く、秋に麦を作付けする畑は夏期に休閑され、夏の雨と陽気を収蔵する夏起こしが実施された。[4] 山東河南などに比べて雨量が少なく、かつ年ごとに不安定で、しかも作物成育日数も少ないことが、この作付方式を必然化していた。

更に、これらの地域の北方には、年一作地帯が広がっていた。山西省太原府寿陽県出身の大官祁寯藻が致仕の後、道光

一六年に著した『馬首農言』をみよう。寿陽は穀雨を待って夏作物が蒔かれ、秋分にはもう霜が降るという土地柄で、[5]作物成育日数は一層少なかった。『馬首農言』の作付方式は、粟・黍と黒豆の交代を基調とする年一作である。[6]確かに麦も作付されてはいる。しかしその作付面積は、全体の一〇パーセントを占めるに過ぎない。[7]二毛作を成立させるのは、僅かに麦後の蕎麦（そば）のみである。[8]この作付方式において、穀物の販売条件が『農言著実』に比しても一層厳しくなるのは当然である。同地が販売できるのは黒豆と余剰のある年の粟のみである。[9]同様な年一作方式は、華北の北部周辺地域に広く存在した。山西代州の地でも麦の作付率は低く、粟を主体として蕎麦・燕麦が中心的な作物とされていた。[10]河北易州では、七月に早くも霜が降る。清明に蒔かれる麦・豆と、五月に蒔かれる粟などが作付の中心で、収量は豊年でも畝ごとに斗に満たない有り様であった。[11]

華北の作付方式は決して一様ではなかった。山東河南を中心とする二年三作地域から、やや条件の悪い不完全多毛作地域、更にその周辺の年一作地域と、段階的に多様な作付方式が広がっていた。唐宋変革を境に二年三毛作が華北で一般的に成立したという見解は、それ以前には二年三毛作が無かったという理解と同様に疑わしい。[12]清代後期になっても二年三作は決して一般的現象ではない。同時に二年三作を近百年のこととする説にも従えない。[13]華北のある地域では、二年三作はそれ以前から広く成立していた。

さて、ここに見た作付方式の地域区分は、同時に生産力水準と商業的農業発展水準上の地域区分とも、おおむね一致する。二年三作地帯は、単に生産量が多いだけではなく、商品価値の高い麦や大豆を生産し得ることにより、最も商業化の条件に恵まれていた。同時に該地域は、かかる相対的な高収益性を基礎に、華北において特用農産物の生産が最も広く行われている地域でもあった。既に先学の研究も明らかにしているように、[14]河間府・真定府以南の直隷、山東の青州・済南・東昌・兗州などの各府、加えるに河南省東部の諸府は、明代以降棉作の中心地であり、明代には江南向け原棉産地として、明末～清代には、原料移出地であると同時に独自の棉布生産地として登場する。また明代後期に広東・福建地方に輸

入されたタバコは、明末には急速に栽培が広まり、華北でも商業的に栽培されるに至った。その中心地は、棉作同様に山東兗州府など、華北における先進地域であった。

これら地域に比べ、かの不完全多毛作地域・年一毛作地域は、商業面でも一層劣等なる条件の下に置かれていた。『農言著実』では余剰の麦が販売され、『馬首農言』では主に黒豆が販売されるに過ぎなかった。しかもこれら地域は、商品価値の必ずしも高くない穀物を販売し、その代金で、運送費がかさんで割高となった棉花など特用農産物を、他地域から購入せねばならなかった。清代後期に至っても、陝西省全体で棉作の行われているのは数県に足らず、麻も作られず、同省は割り高な棉花等を江浙・四川・河南などから移入していた。『豳風広義』は、陝西の貧困の原因を、生産と流通のかかる特性に求めている。[15]『日知録』も同様な見解に立つ。[16]また『馬首農言』によると、棉作の困難な山西中部の寿陽の地では、先述した直隷真定府下の各県から、東布と呼ばれる棉布を移入し、また原棉も年々数千駝買い入れ、同地で織布していた。寿陽で織られる棉布は、粗布として農民の間で用いられる外、一層周辺的な地域へと販売されたのであった。[17]同様な現象は隣の楡次県でもみられた。[18]陝西や山西の地は、山東・河南・直隷南部の地に比べ、生産力水準の低さと収益性の低さに規定されつつ、商業的農業の水準においても、一段低い位置に置かれていた。

しかし長江下流域と結びつき、華北では最も生産力水準の高かった山東河南などの地方でさえ、同地の農産物が長江下流の肥料となったことが象徴的に示すように、長江下流に比べると、その収益性は格段に低い水準にあったこともまた事実である。長江下流域→山東河南等→陝西山西要部→周辺地域へと生産力水準の層序が存在し、それは同時に商業的農業発展の層序でもあり、これが清代における商品流通の大勢をも決定していた。

① 『皇朝経世文編』巻三五　農政上
李兆洛「鳳台県志論食貨」
地率両歳而三収。二月種黍。七月而収已。九月種麦。至四月而収。五月種菽。九月而畢収。乃稍息之。及明年二月復種黍。

尹会一「敬陳農桑四務疏」（原載『尹少宰奏議』巻三）
播麦之期在白露。如天気尚暖。当於白露十日後種之。種高粱。当臨清明節。種早穀。当臨穀雨節。種棉花。当在春末夏初。豆子晩穀。則於五月刈麦之後。在麦地播種。

② 乾隆『汲県志』巻六　種植

③ 『知本提綱』農則耕穫一条

即如秦地。二月種麻菽。……五月中旬種粟穀。……八月社前後種麦之類。……

即如秦中麦秋。在芒種前後。……

④ 同前

耕麦田以夏。蔵其内柴。……麦為旱田。夏日耕之。受炎日之暄照。得雨収斂。更迭耕労。捻蔵陽気於内。来年麦発。自有力矣。

⑤ 『馬首農言』彭序

寿陽蹈太行之項。……故其気候特寒。穀雨播種。秋分隕霜。

⑥ 『馬首農言』種植

穀多在去年豆田種之。亦有種於黍田者。亦有複種。……穫後去其根。犂之令地歇息。

黒豆多在去年穀田或黍田種之。万勿複種。

高粱多在去年豆田種之。

（黍）於去年穀田黒豆田。芒種時種之。

⑦ 『馬首農言』種植

春麦於去年黒豆小豆田。春分時種之。

宿麦於秋分前後種之。

同前所引『種植諸説』

寿陽麦不宜多種。大率十畝中種一畝。……黒豆宜多種。易収（太原迤西。黒豆多販自寿陽）。穀供一邑之食。有余販之他邑。

⑧ 『馬首農言』種植

蕎麦多在本年麦田種之。

⑨ 注⑦参照。

⑩ 乾隆『易州志』巻十

雲中地土。沙磧磽薄。寒気独早。七月隕霜。農人清明前後種麦豆。五月種穀粟秫菽麦油麦。豊歳畝収不満斗。

⑪ 乾隆『直隷代州志』巻一

代地無宿麦。種春麦者。不過十之二三。稲惟滹沱南北諸村種之。民食以粟為主。佐以蕎麦燕麦。貧者黍菽。即為珍膳。

⑫ 西嶋定生氏の「猥磑の彼方」（『歴史学研究二五　一九四九年）以来の諸見解。

⑬ 前掲西山論文。同論文と拙稿の作付方式に関する見解の分岐点は、『西石梁農圃便覧』の作付方式の評価などにある。私はこれまでに示した農書・地方志の幾つかが現わしているのは、二年三作以外の何物でもないと考えた。

⑭ 西嶋定生「明代における木棉の普及について」『史学雑誌』五七―四、五・六　一九四八年。李之勤「論鴉片戦争以前清代商業性農業発展」『明清社会経済形態的研究』一九五七年、など多数。

⑮ 『豳風広義』弁言

至於木棉麻苧。又非秦地所宜。絲帛布葛。通省無出。……雖有数県木棉之出。然不過一県中百分之一。不足本地之用。豈能広布通省。是以秦人歳歳衣被冠履。皆取給於外省。而売穀以易之。穀売之於遠方。是穀輸於外省矣。糸帛木棉布葛之属。買之於江浙両広四川河南。是銀又輸於外省矣。毎歳必売食買衣。因衣之費。而食減其半。其艱於食者。固自不少。而欠於衣者。抑已良多。

⑯ 『日知録集釈』巻十　紡織之利

今辺郡之民。既不知耕。又不知織。……華陰王宏譔著議。以為延安一府。布帛之価。貴於西安数倍。既不獲紡織之利。又歳有買布之費。生計日蹙。国税日逋。（陳文恭曰。陝西為自古蚕桑之地。今日久廃弛。綢帛資于江浙。花布来自楚宇。小民食本不足。而更売糧以製衣。宜其家鮮蓋蔵也。）

⑰ 『馬首農言』糧価物価

棉花出直隸欒城趙州等処。毎斤自一百四五十。至四百上下。布出直隸獲鹿欒城等処者。謂之東布。毎尺三十上下。至四十上下。出本邑者。農人所需。較東布為多。余布鬻於北路。毎尺銭二十上下。
又邑之棉花。買自欒城。統計一邑。毎年不過数千駝。
また光緒『寿陽県志』巻十にも同様な記述がある。

⑱ 乾隆『楡次県志』巻七　物産
楡人家事紡織。成布至多。以供衣服租税之用。専其業者。販之四方。号楡次大布。労給数郡。自太原北辺諸州府。皆仰市焉。亦貨於京師。其布雖織作未極精好。而寛於辺幅。堅密能久。故人咸市之。

## 四　大規模経営の社会的位置とその解体傾向

第一章・第二章の検討を通じ、清代の華北では、大農法集約化と、農耕牧畜を結合させた地力維持方式を技術的な基礎とする大規模経営が、相対的に高く、かつ安定した生産力水準を担っており、華北民農書の主体であることを明らかにした。

かかる大規模経営は、華北では特殊な存在ではなかった。『山東経営地主底社会性質』の巻末に付された一三一家にのぼる経営地主の具体例①は、その広がりを雄弁に示しており、また併せ載せられた一九七村の階級構成の概略も、長工を多数使用した「地主」が、広く存在していることを明らかにしている。

ここで重要なことは、第二章でみた生産力構造に規定されて、大土地所有者は大規模経営者ではあっても、地主佃戸制を基礎とした所謂大地主ではないことである。片岡氏も指摘されるように、華北の大土地所有者が、江南の寄生的な地主とは明白に異って、生産者的側面を持っていたことは、当時の識者も認めるところであった②。しかも、かかる生産者的性格は、単に布衣の土地所有者に見られるだけでなく、士大夫層にまで及んでいる。華北先進地帯においても、在郷の士人の間には農業を営む者がみられたが③、周辺地方に行くと、士大夫も農業を営むことは自明のことであった④。『西石梁農圃便覧』『農言著実』の著者は、いずれも士大夫の家に属し、『馬首農言』の著者は、礼部尚書にまで登った高官である。寺田隆信氏によって分析紹介された陝西の生んだ宰相の家、同州馬氏一族も、一方で官僚を輩出しつつ、同時に農業を経

営し、高利貸と商業も営まねばならなかった。[5] 所謂郷紳の華北における存在形態は、かかる生産者的性格を強く持ったものであった。

しかし、所有と経営が未分離であり、地主佃戸制が体制的には未展開であることは、華北において零細経営者が広範には存在しないことを意味するのではない。否、むしろ巨大経営は、零細経営者が自己の周囲に存在することを、地主佃戸制以上に必要とする。巨大経営は小農民に比べて、概して多数の家族を抱えていた。しかし家族成員は必ずしも直接に労働には参加していない。これは『農言著実』の経営者の仕事が管理労働中心であったことからも分る。このため多数の長工が年々雇傭されねばならないこと、更に、巨大経営においては、長工でさえも管理的労働に携る場合があり、冬作の収穫→夏作の播種→中耕除草といった労働ピークを中心に、労働過程の技術的性格と経営規模に規定されて、極めて大量の短工が必要とされたことも既に諸農書の分析でみた。雇傭労働力、とりわけ短工が確保される前提には、一方の経済的基盤を自己の経営地に持つ小生産者が大規模経営の周囲に多数存在することが必要となる。長工でさえも自家の経営地を持つことが前提となる。長工の賃金水準を考えると、[6] 一人の労賃で家族を再生産することは不可能であった。かくて華北の社会構造は、一方における少数の大土地所有者＝経営者と、その対極の多数の零細所有者＝経営者が、畜力牽引による旱地農法を自立して行い得る中間的農民層をはさんで、対抗的に存在する配置をとる。民国期に実施された農村調査のうち、比較的商業的農業の未展開な後進村落において見られる少数の巨大家族＝巨大所有者＝巨大経営と、多数の零細所有者＝零細経営が対抗する構成は、かかる伝統的階級構成の存続を意味する。[7] 前近代には総括的な表現を持ち得ていないが、間接的な表現としては、戸則分類にもとづいた同様の分布を、山根幸夫氏の研究[8]などから知ることができる。

このような社会構造の軸となる大規模経営の歴史的評価を、当面必要な限り述べておこう。まずそれは、漢～六朝期に検出された家父長的奴隷制経営としての富豪経営[9]とは、同じ大農法による大規模経営であっても、その性格を異にする。そこでの労働力は、何如に歴史的に手垢の付いた伙計・牛倌などの言葉で呼ばれようとも、契約によって雇傭され、現物

もしくは貨幣で賃金を支払われる人々を主体としていた。その耕地の規模と形態もまた異る。畜力牽引の大型化は、耕地の巨大化を意味せず、華北先進地帯における大規模経営の限界経営規模は、率ね四〜五〇〇畝である。[10] かの家父長的奴隷制経営に比べると、むしろ減少傾向にあると言えよう。大農法が基礎であっても、耕起整地の入念化と、地力維持方式の高度化による集約化を必要とする限り、必然的な勢いである。また、富豪の荘園が未開墾地を含む一円的なものであったのに対し、清代の大規模経営の土地集積は、太和堂に典型的に見られるように、主要には耕地の零買によって成立していたことは、言うまでもない。家父長的奴隷制経営は変質・解体を遂げていた。解体の背景には、農業技術の集約化と、集約化が周囲の一般の小経営に与えた自立性とがあり、それが所有と労働に変化を与えたと考えられる。

しかし清代華北の大規模経営は、雇傭労働を用いた大規模経営ではあっても、富農経営とは即座に断じ得ない。なぜならば、その農業は充分に商業的とは言えないからである。少なくとも周辺地域に展開する巨大経営の自給性は明白である。家父長制的性格を脱しつつも、未だ富農的には展開しない大規模経営が、清代華北における安定的な自営農民の一つの有力な存在形態であった。

以上個別経営事例の分析から始めて、大規模経営を軸とする社会構造までを展望した。然し明末から清代にかけての社会構成を考える上で、見逃し得ないもう一つの側面がある。それは伝統的な大規模経営の解体が始っていることである。大規模経営解体の傾向は、民国期の農村調査では、より数量的に、より鮮明な形で現われ、商業的農業の本格化によって原因づけられている。[11] しかしこの傾向は、既に清代に開始されている。『農言著実』と『西石梁農圃便覧』の経営方式の相違は、これを象徴的に示している。遅れた、より自給的な農業地帯で完全な直接経営を営む『農言著実』の楊家と、より生産力水準が高く、些か農産物販売の条件にも恵まれた地域で間接経営を営む『西石梁農圃便覧』の丁家の対比である。生産力構造の変化の問題から論じよう。

『農言著実』と『西石梁農圃便覧』の経営方式の違いを生む生産力的条件は、まず旧来の作付方式そのものの中にも存在していた。山東河南等にみられた典型的な二年三作においては、『農言著実』の如き作付方式に比べて、農作業がより通年的に間配られており、より小規模な労働単位へと経営が分割される技術的条件が既に存在していた。この契機は、同地の作付方式がより商業的でより多収的で従ってより集約的であることによって、一層増幅されたと考えられる。

しかし大規模経営を分解せしめる生産力的条件は、本格的には別の所に芽生えていた。第二章で見た農耕方式とは全く別の方式が華北に登場することである。それは商業的農業、とりわけ特用農産物生産の本格化を起点とする。

販売のための農業は、宋代以降の都市発展の中から、古典的には都市向け疏菜栽培として始る。都市向け疏菜が他の農法とは異質な、格段の集約性を以て栽培され、単位面積当り高収益をあげたことは、夙に北村敬直氏の示された李兆洛の一文を以てしても明らかである。[12] 鳳台県の人鄭念祖は、山東兗州の人を用い、周囲の農民に比べ単位面積当り一〇倍の肥料と労働力を投じて促成栽培し、充分な収益をあげたという。

同様な変化は、特用農産物の栽培が華北の一部地方で本格化する中で、より体制的に開始される。第三章でみたように、二年三作の中心地帯は、同時に棉作・タバコ作の華北における中心地でもあった。華北の棉作・タバコ作の生産力水準は、長江下流域に比べると一段劣るものの、一般の華北農法に比べると格段の集約性を持っていた。『増訂教稼書』によると、通常の栽培方法では畝当り粗収益が三〇〇〇文許りに過ぎない穀物作に対し、タバコ作の場合、穀物生産の数倍の労働と肥料等の費用をかけることによって、七五〇〇文許りの粗収益をあげることができたという。[13] 『玉堂荅記』も、タバコ作は主穀に比して一〇倍の収益があると言う。[14] タバコ作がいかに多肥多労働を要求したかは、地域は異るが、包世臣も『安吳四種』で述べており、それによると、タバコは水稲に比して六倍、旱田作物の四倍の肥料を要し、労働の面でも他の作物の一〇倍余りを要した。[15]

同様な集約農法は棉作に対しても適用される。『農政全書』に引かれる「張五典種法」は、山東信陽の人、張五典が、

万暦四三年に上海で語った山東の棉作法である。[16] そこには全面施肥による基肥、或いは苗辺に対する追肥、六〜七回に及ぶ中耕除草、三度にわたる摘心など、極めて集約的な技術が記されている。同書の記述が当時の華北棉作の一般的水準であると認めるわけにはいかないが、棉花が多肥多労働を要する作物であったことは、疑いを容れない。『西石梁農圃便覧』も『群芳譜』を藍本にしてはいるものの、播種量・株間等に創意を加えながら、穀作に比して集約的な技術を記す。[17] 陝西など比較的辺地では、藍などが特用農産物として栽培されていたが、そこでも極度な多労働と施肥が特色となる。

農耕方式全体から見てもう一つ見逃し得ないのは、特用農産物が多肥を要求し、また多肥が収益を左右することになった結果、従来の自給的家畜糞とは異質な金肥が、特用農産物中心に投ぜられるようになることである。『証俗文』は、山東地方でタバコ作が盛行し、肥えた土地から穀物作を駆逐していることを語り、同時に肥料として豆餅が用いられていることも語る。[18] 『知本提綱』においても、藍作のために大量の「油渣」が投ぜられている。[19] かかる厩肥依存からの脱却は、商業化にその一つの動機を持つと同時に、特用農産物栽培への傾斜が、従来家畜の飼料となってきた主穀茎葉と飼料作物の自給を破壊することにも一つの原因を持つ。[20] 畜力牽引の意義が相対的に薄れたことも理由の一つであろう。

とまれ明末以来、華北農業は、単位面積当り労働量においても、地力維持方式においても、また畝当り収益においても、従来とは異質な体系を成長させつつあった。「主穀茎葉と飼料作物→家畜大量飼育→肥料自給・畜力を用いた大農法」という従来の華北農法体系は、新しい集約的な農法の前では、少なくとも単位面積当りの収益性において、見劣りのするものになりつつあった。

商業的農業を跳躍台として、華北においても小規模集約的農法が、漸く生産力的優位を示しつつあった。商品生産を前提とする以上、大規模経営の解体は、所有と経営の一致した小規模経営の満面開花へは最早結びつかない。小規模集約農法を基礎とする経営からの地代収取による地主制が、漸く直接経営に対して優位を示しつつあった。極端な大土地所有者の土地貸し出しや、新規開墾に伴う地主制に加えて、生産力的基礎を持った地主佃戸制の条件が成熟しつつあった。

この傾向は、旧来の作付方式においても最も小規模化の条件に富み、しかも商業的農業が華北では最も広く展開していた山東・河南などを中心に生れた。しかし地主制への転化は一挙には実現しない。それは種々の過渡的形態を伴いながら進行する。『西石梁農圃便覧』にみられた犂戸の極めて過渡的な性格はこの一つであろう。同地域には、労働過程から分離した地主対小作人という整った地主制と直接経営の間に位置する様々な過渡的経営体が、多数検出されている。犂戸がその一つなら、租地的に対する拉鞭的・大種地的[21]、代地に対する荘家[22]、陪牛に対する把鋤[23]、著名な二八鋤地等々……。長江流域では既に体制的には克服された粗野な形態の地主制＝分租制が、かの二年三作地帯に顕著に広がっていることを明らかにしたバックの調査は、このことを総括的に示している[24]。華北地主制は形成過程にあった。

① 但し同書の富農と地主の区分は、富農の本来の定義にもとづいていない。「出租土地五〇畝以上」の地主を除けば、同項の「地主」は全て経営地主に属し、五〇畝以上貸し出している土地所有者も、厳密に言えば多くは経営地主に入れるべきものであろう。続く「光緒期山東四六県一三一家経営地主経済風貌一覧表」のうちのかなりの経営地主が、限界経営規模以上の土地を貸し出しており、それは多くは五〇畝を越える。

② 陳弘謀『訓俗遺規』巻四　史搢臣願体集
又如北方有田者。縦使富饒。多係自種。必須労力労心。南方之人。田与佃種。坐享其成。
孫嘉金『孫文定公奏疏』巻八　蠲免事宜疏
江南業主。自有租額。其農具籽種。皆佃戸自備。而業主坐収其租。直隸則耕牛籽粒。多取給於業主。秋成之後。視其所収。而均分之。与佃戸同其苦楽。

③ 乾隆『汲県志』巻六
邑士人。多専習制芸。四郷則有士而兼農者。

④ 天啓『同州志』巻二

⑤ 寺田隆信「陝西同州の馬氏―明清時代における一郷紳の系譜―」『東洋史研究』三三―三　一九七四年。

⑥ 『中国農業史資料』一一〇頁以下、及び『山東経営地主底社会性質』一一八頁以下などにより、当時の賃金水準が窺われる。

⑦ 例えば満鉄資料課天津事務所『第二次冀東農村実態調査報告書』（一九三七年）の平谷県の事例など。

⑧ 山根幸夫「明代華北における役法の特質」『清水博士追悼記念明代史論叢』一九六二年、二三二頁など。

⑨ 前掲渡辺論文。

⑩ 『山東経営地主底社会性質』一〇六頁以下の表を所有規模別に分類すると、経営規模は土地所有が増加しても四〇〇畝台で、ほぼ頭打ちとなることがわかる。

⑪ 例えば『北支那の農業と経済』第三部第一章の分析参照。

⑫ 『皇朝経世文編』巻三六　農政上

⑬ 『増訂教稼書』巻下

済南種烟法略。有区田之意。有東郷臧君虚斉。忽以種烟地。種蜀黍。其説謂。方畝之地。種烟三千株。今種蜀黍亦如之。不令其多。以中数計之。畝得烟葉五百斤。斤得銭十五文。蜀黍每株三穗。其収三倍常田。售之得銭九千文。而藁秸在外。又烟有時不能速售。高粱則無不售之時。其工費。烟居六之四。蜀黍居六之一。而種烟之煩労。又数倍於蜀黍云。

⑭ 『玉堂嘗記』巻下

烟酒古不経見。遼左有事。調用広兵。乃漸有之。自天啓年中始也。二十年来。北土亦多種之。一畝之収。可以敵田十畝。乃至無人不用。

⑮ 『斉民四術』農二　庚辰譜著二

且種烟必須厚糞。計一畝烟葉之糞。可以糞水田六畝・旱田四畝。又烟葉除耕鋤之外。摘頭・捉虫・採葉・晒窠。每烟一畝統計之。須人五十工而後成。其水田種稲。合計播種・拔秧・蒔禾・芸草・収割・晒打。每畝不過八九工。旱田種棉花・豆・粟・膏粱。每畝亦不過十二三工。

⑯ 『農政全書』巻三五　蚕桑広類

⑰ 『西石梁農圃便覧』三月

⑱ 『証俗文』巻一　烟

……今北方転盛。一家男婦。無慮数口。尽解喫烟。上地膏腴。豆餅糞田。悉為烟葉。

⑲ 『知本提綱』農則耕稼一条

呂家固常親験。有三収者。其法。冬月預将白地一畝。上油渣一百五六十斤治熟。春二月種大藍。苗長四五寸。至四月間。套栽於其空中。再上油渣一百五六十斤。五月挑去大藍。又上油渣一百五六十斤。六月剪去小藍。即種粟穀。秋収之後。犂治極熟。不用上糞。又種小麦。次年麦収。復栽小藍。小藍収。復種粟穀。粟穀収。仍復犂治。留待春月種大藍。是歳皆三収。地力並不衰乏。而獲利甚多。糞耕者可弗三復是言乎。

⑳ この関係については、前掲『北支那の農業と経済』第四部第一章参照。

㉑ ワグナー『中国農書』邦訳一九三〜四頁所引。

㉒ 乾隆『汲県志』巻六

農人自備牛具車輛。佃種人田。謂之代地。自種者少。亦有田主出牛具。招人代種者。謂之莊家。

㉓ 万暦『景州志』巻一。賃作人等を用いた経営の優位性、経営規模等を示す部分も含めて引用する。

景土広闊。原隰高下。均宜播種。故富厚之族。置地多連阡陌。每時雨後。庄頭賃作人。一直半百。競力先種。収視貧戸加倍。主田者為庄家。招甸者為客戸。客戸具牛四頭。謂之陪牛。春種若穀黍之類。出之庄家。秋穫若豆麦之類。主客各出一半。収則均分。無牛者。惟管庄田耕種。謂之把鋤。子粒均分。稈草□□収之。力大者。耕至二三頃。一頃以下者為小。

㉔ John Lossing Buck, *Land Utilization in China, Atlas*, 1937, p. 42.

## おわりに

唐宋変革以後の華北農法の発展は、畜力牽引大型化による深耕精作と、家畜飼育や飼料栽培を組み込んだ自給的地力維持方式の改善とを軸とする大農法集約化を特徴とした。この生産力を最も安定的に実現し得るのは、長短の雇傭労働を多

数駆使し大量の家畜を飼う大規模経営であった。彼等こそ華北民農書の主体であり、所謂郷紳の華北における一存在形態であった。彼等は家父長制的奴隷制経営の性格を既に脱してはいたが、充分に商業的な経営でもなく、華北における安定的な自営農の一つの存在形態であった。清代華北の社会構造は、所有と経営の未分離なかかる大規模経営の対極に、大規模経営が不可欠の前提とする小規模経営(所有)者が大量に存在する配置をとる。長江下流の地主佃戸制を基礎とした社会像は、そこには必ずしも適合しない。

しかし一方で、二年三作の行われて来た華北の中心地帯から、大規模直接経営は解体を始めていた。それは特用農産物を中心とする商業的農業が、従来とは異質的な格段に集約的な農耕方式を生み出したことによって加速された。大規模直接経営は次第に解体し、地主佃戸制が広がりつつあった。しかしその過程は一挙には進まず、様々な過渡的形態を伴いながら進行中であった。地主佃戸制は小規模経営の安定的自立によって〃解体の危機に瀕し〃ていたのではなく、むしろそれによってこそ安定的な形成を遂げると言うべきではなかろうか。

紙数の関係もあり、小稿では商業的農業の開始の結果を、地主佃戸制の面からのみ注目した。しかし、集約的な商業的農業は、雇傭労働を用いる従来とは異質な経営形態をも生んだようである。華北以外の地域の経営分析とともに、稿を改めて論じたい。

（熊本大学文学部講師

# The Farm Management and the Social Structure in North China in the *C'ing* 清 Dynasty

by

Keiji Adachi

This article analyses the farm management in North China in the *C'ing* Dynasty as a part of my attempt to examine what stage the mode of production of a small-scale operation had reached before the influence of opening the ports to foreign trade became serious.

The predominant management, which was at that time mentioned in the books about agricultural operation, was there relatively large-scale one. It had two technical features. One was the deeper tillage by increasing cattle for truction. The other was the improvement of the method for maintaining the fertility of soil; it provided manure by raising livestock and cultivating feed. The rural community consisted of a small number of large-scale managements and small-scale estates, from which the former was supplied with labor.

Another feature was that, in the face of a system of new intensive techniques brought about by the beginning of the commercial agriculture, these large-scale managements started to collapse first in the areas, such as *Shantung* 山東 and *Honan* 河南, where three crops were raised by two years. The indirect management or sharecropping, a rough form of landlordism, was just going to spread.